

赤谷森林ふれあい推進センター所長が語る

所長 魚住 悠哉

1. はじめに

「赤谷の森」と聞いて、どこにある森かご存じの方は少ないかもしれません。「赤谷の森」は、利根川の最上流部、群馬県みなかみ町の新潟県境に広がる国有林であり、「赤谷プロジェクト」の対象エリアになっている森の名称です。

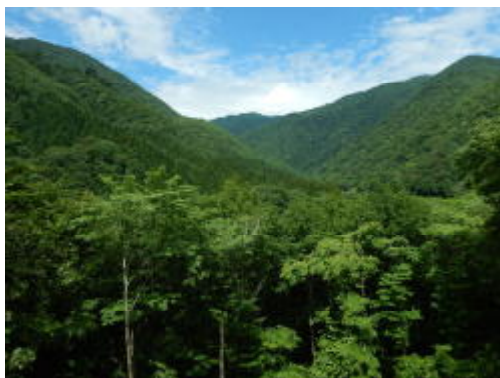
2. 赤谷の森の紹介

みなかみ町の新治地区（旧新治村）に広がる山々は、江戸時代には林業が行われるとともに、薪炭林や採草地として利用されてきました。大正から昭和初期にかけては、木材や木酢液の生産のため、自然林が大規模に伐採されて二次林や人工林の割合が増え、また、昭和30年代以降、高度経済成長期の木材需要に応えるため、全国的に進められた拡大造林の時代を経て、スギやカラマツの人工林が増えていきました。

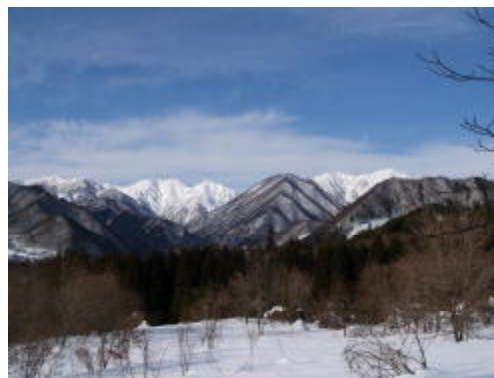
このような森林と人との関わりを経て、現在の赤谷の森は、ブナやミズナラの自然林や、かつて薪炭林として利用されていたコナラやクリなどの二次林、そしてスギやカラマツの人工林といった、多様な構成の森林となっています。

赤谷の森は、太平洋側と日本海側の中間に位置し、さらに東北にも近い地理的環境から、多様な生態系を有しています。高等植物は826種、ほ乳類は43種と本州に生息する在来ほ乳類の多くが確認されています。赤谷の森には1つがいのイヌワシ、4つがいのクマタカが生息していますが、この地域はイヌワシの分布域の南限、クマタカの分布域の北限にあたり、両種が同じ地域に生息していることが確認できる珍しい環境と言えます。また、南ヶ谷湿地という小さな高層湿原には、モリアオガエルやクロサンショウウオなどの稀少な生物が確認されています。

新潟県境の三国山、平標山、仙ノ倉山など谷川連峰に繋がる稜線部には、高山植物のお花畑が広がり、越後と関東を結ぶ旧三国街道とともにハイカーに親しまれており、高低差1,400m、面積約1万haの赤谷の森は、豊かな自然と歴史を抱える地域の財産と言えます。



(夏の赤谷の森)



(冬の赤谷の森)

3. 赤谷プロジェクトとは

(1) 赤谷プロジェクト発足の経緯

赤谷森林ふれあい推進センターや赤谷の森を紹介する上で、まずは「赤谷プロジェクト」について説明しなくてはなりません。

「赤谷プロジェクト」とは、赤谷の森を、地域住民で組織する「赤谷プロジェクト地域協議会」、(公財)日本自然保護協会、林野庁関東森林管理局の3つのセクターが中核団体となって、3者が協働して生物多様性の復元と持続的な地域づくりを進める取組です。

平成15年に発足した赤谷プロジェクトの経緯をたどると、1980年代後半までさかのぼります。当時、旧新治村の猿ヶ京地域でのスキー場開発計画や川古ダム建設計画が決定される中で、村の重要な水源地の自然が破壊されることを懸念した旧新治村の有志の方々が、「新治村の自然を守る会」を結成し、開発中止を求めて活動を開始しました。また、「新治村の自然を守る会」から相談を受けた(公財)日本自然保護協会もこの活動に協力し、この地域での自然保護運動が10年間続けられました。そして、赤谷の森の自然を調査していく中で、イヌワシやクマタカの営巣も確認されるなど、豊かな生態系が残されていることがわかりました。

2000年代に入り、経済情勢の変化も受け、スキー場とダム建設計画は中止となりました。また、林野庁においても、国民の森林に対する要請の多様化に応え、森林の有する公益的機能の発揮を重視するという方針から、新しい取組を行う機運ができていました。

このような情勢の中、(公財)日本自然保護協会から、赤谷プロジェクトの立ち上げについて提案があり、平成15年、赤谷プロジェクト地域協議会(新治村の自然を守る会)、(公財)日本自然保護協会、関東森林管理局の3者で「三国山地／赤谷川・生物多様性復元計画(略称「赤谷プロジェクト」)」の推進のための協定を締結しました。そして、平成16年に赤谷プロジェクト推進のための現場組織として「赤谷森林環境保全ふれあいセンター」(平成25年に「赤谷森林ふれあい推進センター」に名称変更)が設置され、本格的に赤谷プロジェクトの取組が開始されることとなりました。

(2) 赤谷プロジェクトのしくみ

赤谷プロジェクトでは、立場の異なる3者が協同し、赤谷の森の生物多様性保全と持続的な地域づくりに取り組んでいくため、企画運営会議という会合を年に2回開催し、3者の合意形成を図っています。

取組を進めて行く上では、科学的知見に基づいて森林生態系を把握し森林管理を行うことが必要です。このため、動物、植生、地域社会など各分野の専門家が科学的な立場から参加し、森林を様々な視点から総合的に把握・評価する自然環境モニタリング会議と、7つのワーキンググループが設置されています。上述の企画運営会議は、この自然環境モニタリング会議からの助言を受けて議論を行っています。また、赤谷プロジェクト・サポーター制度を設けて、赤谷プロジェクトに賛同・協力していただける地域内外の参加・協力を得ながら取組を進めています。

赤谷の森は、利根沼田森林管理署が管轄する国有林であることから、赤谷プロジェクトの考え方や方針等は、国有林の地域管理経営計画や施業実施計画にも反映されており、利

根沼田森林管理署と共に現地のプロジェクトを進めています。

(3) 赤谷プロジェクトの取組

生物多様性の復元と持続的な地域づくりに向けた具体的な取組の内容を紹介します。

まず、赤谷の森では、自然条件や木材生産にかかる条件等から、木材生産に適さない人工林については、森林資源は利用しつつ、自然林に誘導していくこととされています。赤谷の森の人工林約3,000haのうち、2,000haは将来的に自然林に誘導していくことが目標とされています。

猛禽類については、イヌワシ・クマタカの繁殖状況のモニタリングと生息環境の質の向上に取り組んでいます。イヌワシやクマタカは森林生態系の頂点に立つ動物であり、森の豊かさの象徴と言えます。中でもイヌワシは現在日本で500羽程度と絶滅が危惧されており、このような猛禽類の生息できる森林生態系を保全していくことが重要です。イヌワシが生息するエリアの人工林は、将来的に自然林に誘導していくエリアとなっており、人工林の伐採跡地をイヌワシの狩り場として利用させながら、自然林として更新していくよう、森林管理やモニタリングが行われています。

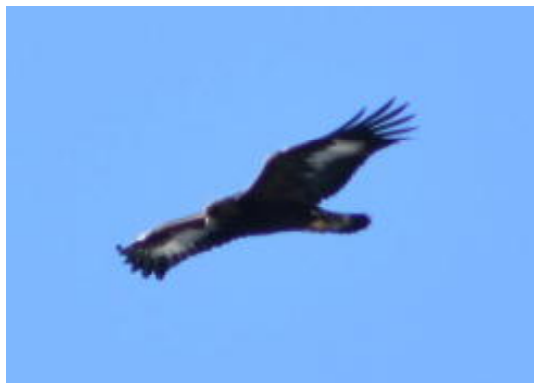
平成28年には、NHKの番組「ダーウィンが来た！」で赤谷の森のイヌワシが取り上げられ、7年ぶりに繁殖が成功した様子や赤谷プロジェクトの猛禽類に関する取組が紹介されました。

また、近年はニホンジカ対策の検討に重点を置いています。10年ほど前まで、赤谷の森ではあまりニホンジカは確認されていませんでしたが、この数年、センサーカメラに写るニホンジカの数が増え、植生への食害も確認されるようになってきています。このため、これ以上ニホンジカの密度が高くならないよう、現在の状態を維持するための管理手法を、県や町の関係機関、地元猟友会の方とも情報共有しながら検討しています。

このほか、森林の生物多様性にとって、重要な要素である溪流環境について、自然の溪流の状態の維持と防災上の対策のバランスをどのように取れば良いかなど、望ましい溪流環境についての検討なども行っています。



(自然林復元試験地)



(巣立ちをしたイヌワシ幼鳥)

赤谷の森の一部は、人工林として木材生産を継続すべきエリアに設定されていて、木材供給を行うとともに、各種事業の中で発生した広葉樹材などの単木的な利用や、地域の一ズに対応した国有林の活用方法等を検討しています。

代表的な事例として、森のカスタネットの復活についてご紹介します。旧新治地区のあ

る工房は、長年に教育用のカスタネットを生産し、一時は日本全国に出荷していましたが、時代の変化・需要の減少などから生産を停止したという話を赤谷プロジェクト関係者が聞きつけ、工房に働きかけを行った結果、森林環境教育の教材として、地域の広葉樹材を使ったカスタネットの生産が再開されました。今ではみなかみ町の木育の取り組みに活用されるなど、みなかみ町のシンボルのひとつとなっています。



(モニタリングで確認されたニホンジカ)



(森のカスタネット)

(4) 赤谷森林ふれあい推進センターの活動

赤谷森林ふれあい推進センターは、群馬県沼田市に所在する利根沼田森林管理署の庁舎内にあります。赤谷プロジェクト推進の現場組織として、企画運営への参加、赤谷プロジェクト関係者や地元関係機関との調整、現地調査への参加、広報活動等を行うとともに、森林とのふれあい推進のため、地域内外の小中学生等への森林環境教育、地域のイベントでのネイチャークラフト体験の提供、各種団体の現地研修の受け入れなどを行っています。

猛禽類のモニタリング調査には我々も時々参加しますが、重い機材を担いで山道を歩き、夏の炎天下や冬の寒さの中でもずっと立ち続けて行う調査は過酷です。普段から調査に入られている専門の調査員やボランティアの方には頭が下がります。

森林環境教育は、幼児から大学生まで、幅広く対象にしており、対象者に合わせて、森林の公益的機能、森林資源や生物多様性と人間社会との関係等について、ゲーム形式のプログラムも織り交ぜながら、楽しく学習してもらえるように工夫をしています。特に、野外活動では、フィールドスコープや双眼鏡を使った動物のモニタリング体験など、赤谷プロジェクトの要素を盛り込んだプログラムも取り入れています。

みなかみ町との共催で、地域内外の一般参加者を集めて行う「赤谷の森自然散策」も年に数回開催しており、旧三国街道の自然や歴史、おいずまたさわ小出俣沢の巨樹巨木の紹介や、冬のスノーハイクなど、赤谷の森の魅力発信にも努めています。

平成29年6月には、みなかみ町がユネスコエコパークに登録されました。赤谷の森はエコパークの核心地域や緩衝地域に該当することから、赤谷森林ふれあい推進センターとしても、引き続きみなかみ町と連携して、赤谷の森の魅力の発信など取り組んでいくこととしています。



おいずまたさわ
(小出俣沢の大カツラの木)



(森林環境教育)



(赤谷の森自然散策)

4. おわりに

平成28年4月に着任して1年半が経ちました。冬季に積雪する地域に暮らすのは初めてですが、登山・旅行に歴史小説が好きなため、尾瀬や谷川岳・武尊山などの百名山に囲まれ、温泉も多く、真田氏ゆかりの史跡が多い沼田、みなかみの生活をとても楽しんでいます。特に新治地区については、プロジェクトを通じて多くの方と知り合い、休日には一緒に田んぼづくりをしたり、お酒を飲みながら地域づくりについて語ったりと、第2の故郷と言えるほどになりました。

森林の生物多様性保全や森林環境教育などの業務を担当するのは初めてでしたが、現場で森林生態系について学んだり、小中学生や親子連れの方々に対して森林の話やネイチャークラフト体験を提供する中で、多くの新鮮な経験を積むことができました。

赤谷プロジェクトでは、自然保護団体、県や町、地域の方々やボランティアまで、立場や考え方の違う主体と協力してプロジェクトに取り組むため、合意形成等に難しさを感じることもありますが、赤谷森林ふれあい推進センターは、これからも、赤谷プロジェクトの推進を通じ、国民の森林づくりに取り組んでまいります。